

第10回ヨーロッパ麻酔学会

岡村 篤*

第10回ヨーロッパ麻酔学会 (10th European Congress of Anesthesiology: ECA) が、ドイツ、フランクフルト市 (Frankfurt am Main) にて開催された。今回はドイツ麻酔学会 (Organ der Deutschen Gesellschaft für Anästhesiologie und Intensivmedizin) がホストとなり、ECA と平行して第45回ドイツ麻酔学会も同会場内で開催された。学会長は Giessen の Justus-Liebig Universität の麻酔科の Hempelmann 教授。会場は大規模な国際見本市の会場として知られる巨大な Messe で、U-bahn, 市電などの交通アクセスも良好であった。開会式では学会長の挨拶に引き続き、ヘッセン州知事、フランクフルト市長らの挨拶があった。学会長はドイツにおける医学研究費の削減 (毎年3%減)、麻酔科医過剰供給の現状に触れていた。州知事、市長ともフランクフルトが、銀行が集まる金融都市であると同時に、偉大な文豪、ゲーテ (Goethe) を生んだ文化都市であることを強調していた。特に市長はフランクフルトが地理的にもヨーロッパ共同体の中心として、経済的にも文化的にも selbständig でなければならないことを強調していた。Honorary Lecture として Siemens の CEO である Heinrich von Pierer 氏の講演があった。講演の中で氏は Siemens 哲学を滔々と演説していた。Siemens は利潤追及、科学技術そのものを信奉するものではなく、企業として人間生活、文化にいかに関与できるかを考えている。これからはマイクロエレクトロニクスの時代で、MRI の画像処理に力をいれている。アジアの経済危機は2、3年で好転すると予測している。我が社は国内で第1位の企業であるという時代は終わった。グローバル化の中で厳しい競争を企業が生き

抜くために全世界的視野に立っていかなければならない。ちなみに Siemens のシェアはドイツ国外が7割である。

気管内挿管の創始者である Franz Kuhn を記念した Franz-Kuhn-Medal がラリンジアルマスクを開発した Dr. Archibald Brain, エチオピアで麻酔を普及させた Dr. Reintraut Burmeister-Rother, Siemens の Heinrich von Pierer の3氏にドイツ麻酔学会から授与された。

学会は invited speakers によるセッションの他、一般演題は口演、ポスターディスカッション、ポスター、と盛りだくさんで、なおかつ興味のあるセッションが多く、毎日の行動スケジュールの計画に頭を悩ませた。そのなかで筆者が聴いたセッションを報告する。心臓麻酔関係では assessment of myocardial function and perfusion のセッションでドイツ、オーストリアからの発表があったが、いずれもアメリカ心臓病学会 (AHA) のガイドラインや Mangano らの臨床データをベースに講演していた。ある演者はヨーロッパではまだアメリカのような規模での臨床データの蓄積がないと言っていた。一般演題では anesthesia in cardiac and vascular surgery のなかで、Mayo clinic の Dr. Abenstein が心臓麻酔における電子化麻酔記録を含む周術期患者情報システムの構築について発表していた。彼等は過去14年間、75000例の心臓麻酔記録のコンピュータ化の経験があり、ハードウェアの老朽化に伴い新システムの構築を行っている。旧システムが stand alone system であった点、新システムで病院情報システム (HIS) とのリンクと術前、術後を包括する周術期患者情報システムを構築しようとしている点など、北大の新旧電子化麻酔記録システムと類似した経過をたどっている点が興味深かった。Mayo の現状は電子化麻

*北海道大学医学部麻酔学講座

酔記録のテスト版がインストールされた段階で、HIS とのリンクはこれからとのこと。心臓麻酔の手術室だけで14室あり、将来的には94の全手術室、60の回復室ベット、75の手術室外の部屋（放射線部などの検査の麻酔など）にも拡張させたいとのこと。規模の大きさには驚く。セッション終了後、Dr. Abenstein と直接話す機会があったが、将来的にコスト請求、物品管理までやりたいと言っていた。我々と考えていることは共通していると思うと共に、北大ではHIS とのリンク、コスト請求の一部はすでに稼働しており、今後は物品管理を充実させなければならない事を再確認できた。

基礎研究分野では Understanding anaesthesia のセッションで Dr. N. P. Franks が molecular actions of anaesthesia と題して講演を行った。過去の lipid membrane の conformational change の概説から始まって、Franks が Lieb と行ってきたこれまでの研究データから general anaesthesia のターゲットは蛋白質であり、preformed protein pocket に麻酔薬が作用している事を主張していた。

医療経済分野では Economics のセッションで、ベルギー、ドイツ、アメリカの3国から発表があり、いずれも医療費削減の嵐の中で、麻酔科としていかに対応していくか模索している状況が窺えた。病院全体のコストに占める麻酔関係のコストは欧米とも5%前後であり、麻酔科が努力して可能なコスト削減はせいぜい、0.7%程度であり、わずかこの程度のために麻酔薬の使用制限を病院側から受けなければならないのは麻酔科医に対するハラスメントである、という意見もあった (Texas の Dr. White)。Neuroanesthesia で著名な Cottrell が座長を担当していたが、自分の専門は neuroanesthesia だが、department の chairman として economics は避けて通れない問題となってしまう

った、と自己紹介していた。ベルギーの Dr. Van den Oever からアメリカの cost per product は欧州の2倍だと指摘され Cottrell が苦笑する場面もあった。

ドイツ麻酔学会の方ではポスターディスカッションで Giessen の麻酔科から麻酔情報管理に関する演題が4題発表された。いずれも Narkodata というドイツの市販システムの導入に関するもので、システム自体は SQL サーバーを用いている点 Mayo clinic、北大と共通していた。SQL のようなリレーショナルデータベースを用いることによる、統計検索のしやすさが強調されていた。

学会最終日には automated record keeping (ARK) に関するセッションがあり、副題が“TOY OR TOOL”と名付けられていた。Pro Con をやるのかと思いきや、8人の演者は皆、Pro 側の人ばかりであった。フィンランドから Dr. Kalli (Datex-Engström のコンサルタントで J Clin Monit Comp の editor でもある麻酔科医) が ARK の歴史を概説した。ベルリン工科大学の Dr. Friesdorf が人間的観点から電子化された麻酔記録が、臨床の場においてデータ収集から情報の形成、さらに知識から患者管理上の意見形成までに果たす役割について述べた。休憩時間に Dr. Friesdorf とコーヒーを飲みながら北大の現状などについて話す機会が持てた。

今回の学会開催にあたっては、演題採択までのスケジュールがかなり遅れ、飛行機、ホテル予約など苦勞した参加者が多かったものと思われる。日本からの参加者は20名以上あったようだ。充実した学会であったと思う。またドイツで国際学会がある際には、ぜひ参加したいという思いを抱きつつ、フランクフルトを発った。